



ユニバーサル 農園のススメ

universal farm

多様な人々が活躍できる農園づくり



はじめに

～ユニバーサル農園とは なぜ注目されているのか～

農福連携とは、障害者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく取組である。当事者である障害者等のやりがいの創出や賃金・工賃の向上にとどまらず、農業分野における労働力不足や荒廃農地の増加といった課題にも対処し、農業・農村と福祉双方に好影響が期待されている。

政府は農福連携を一層推進するため、2019年に『農福連携等推進ビジョン』を策定し、農福連携の取組を促進するための方針を示した。具体的には、農福連携が抱える課題である「知られていない」「踏み出しにくい」「広がっていかない」という問題に対して対策を講じることや、「農」「福」両分野の拡大を推進することなどが示されている。

特に「福」の広がり対象については、障害者に限らず、高齢者、生活困窮者、ひきこもりの状態にある者等の働きづらさや生きづらさを感じている者、犯罪や非行をした者に拡大することが求められている。そのような背景から、ユニバーサル農園が働きづらさや生きづらさを感じている人々の受け皿として機能することが期待されている。

ユニバーサル農園とは、「誰もが農業体験を通じた農業の持つ多面的な機能を享受でき、障害者・生活困窮者・ひきこもり・触法者その他の、子どもから高齢者までの多世代・多属性の者が交流・参画する農園」^{注1)}である。

このような農園の導入は、農作業や人々との交流を通じて自信や生きがいを得る機会を提供することで社会参画を促進し、様々な社会的課題を解決する可能性を持っている。また、農地の農業的な活用を維持・拡大することによって、貴重な地域資源の保全に貢献することが期待される。

本書は、「令和4年度 農林水産省農山漁村振興交付金」を活用し、ユニバーサル農園の先進的な事例分析を行った。

分析手法は、後述する「4つの効果」に留意し、農園の利用者や地域に対して見込まれる様々な効果等を示すこととした。これからユニバーサル農園に取り組もうとされている皆様の参考にしていただければ幸いである。

注1) 農林水産省・国土交通省(2022)「ユニバーサル農園の整備・利用の推進について」
農林水産省・国土交通省2022年2月27日通達



C O N T E N T S

目 次

調査事例の全国分布図	P.3
ユニバーサル農園の見込まれる効果	P.4
ユニバーサル農園の事例の紹介	P.5 ~ 32
▶ 事例1 公益財団法人 喝破道場	P.5 ~ 8
▶ 事例2 かたひらの畑	P.9 ~ 12
▶ 事例3 認定NPO法人 UNE	P.13 ~ 16
▶ 事例4 NPO法人土と風の舎 こえどファーム	P.17 ~ 20
▶ 事例5 とちぎヒーリングファーム	P.21 ~ 24
▶ 事例6 NPO法人たかつき デイサービスセンター 晴耕雨読舎	P.25 ~ 28
▶ 事例7 杉並区農福連携農園 すぎのこ農園	P.29 ~ 32
ユニバーサル農園の開設に向けて ~課題と対応策の整理~	P.33
おわりに ~持続可能なユニバーサル農園を目指して~	P.34



それぞれの事例の全国分布図

新潟県長岡市

認定NPO法人 UNE

P.13~16



取組の
ポイント

できることを仕事にするごちゃまぜ福祉
～ユニバーサル農園とは
「誰でも受け入れること」～

福島県郡山市

かたひらの畑

P.9~12



取組の
ポイント

迷惑をかけないことより
「迷惑をかけあえる」畑に

栃木県野木市

とちぎヒーリングファーム

P.21~24



取組の
ポイント

癒しと触れ合いの市民農園

埼玉県川越市

NPO法人土と風の舎
こえどファーム

P.17~20



取組の
ポイント

子供・大人・お年寄り・障害者
などの「ごちゃまぜ体験農園」

東京都杉並区

農福連携農園
すぎのご農園

P.29~32



取組の
ポイント

多面的機能を活かし、多様な
区民が集う、都市農業型農福
連携農園

香川県高松市

公益財団法人 喝破道場

P.5~8



取組の
ポイント

禅の暮らしとハーブ栽培に
よる自立支援

大阪府高槻市

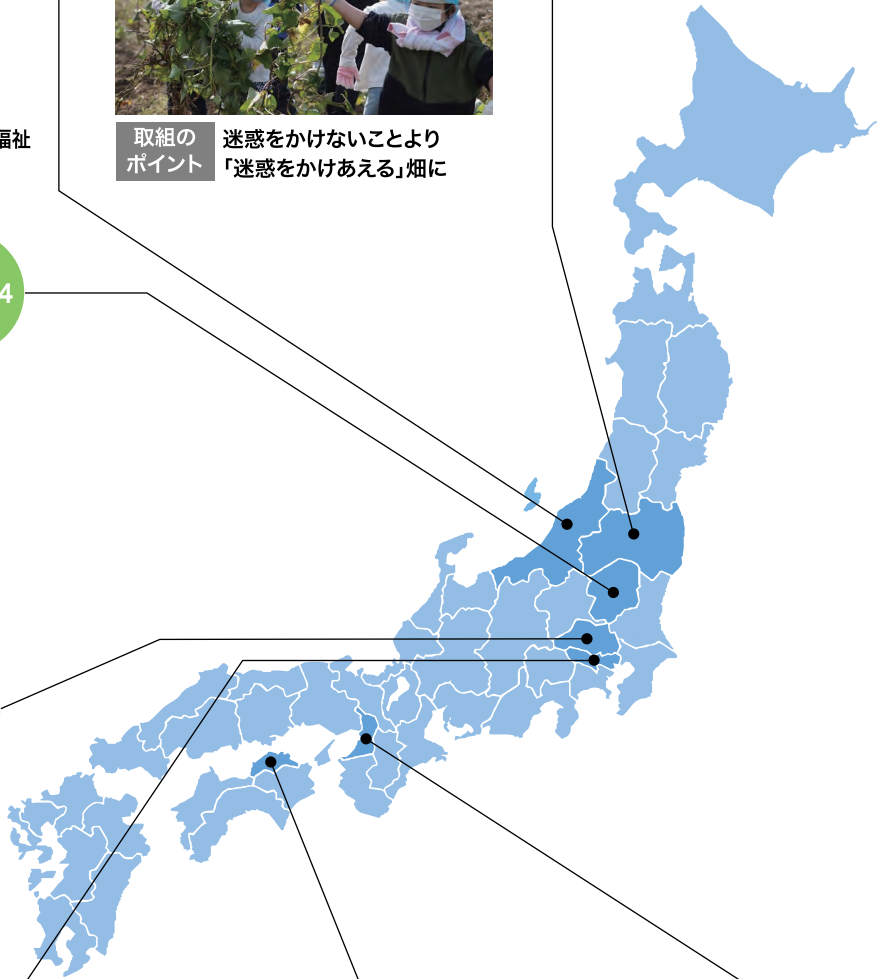
NPO法人たかつき
デイサービスセンター
晴耕雨読舎

P.25~28

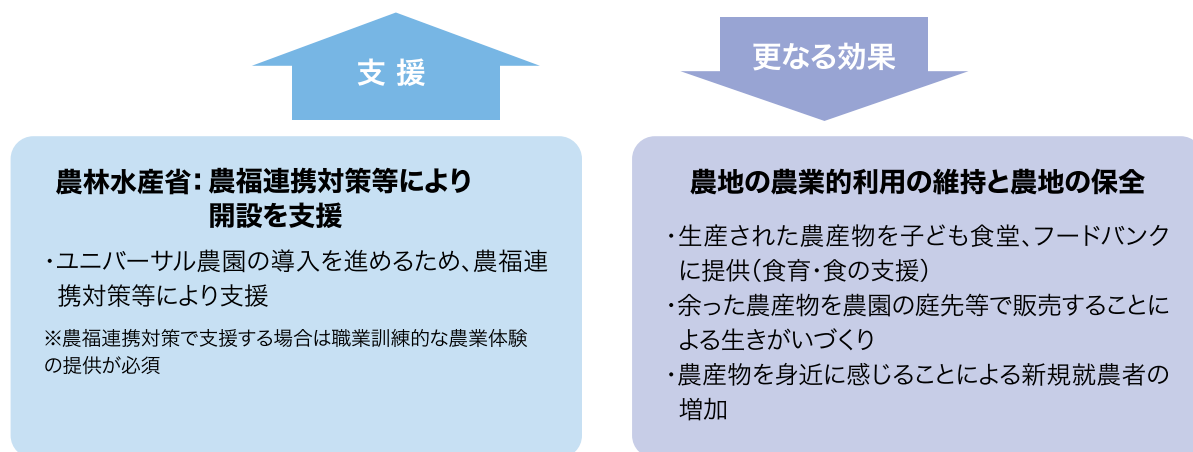
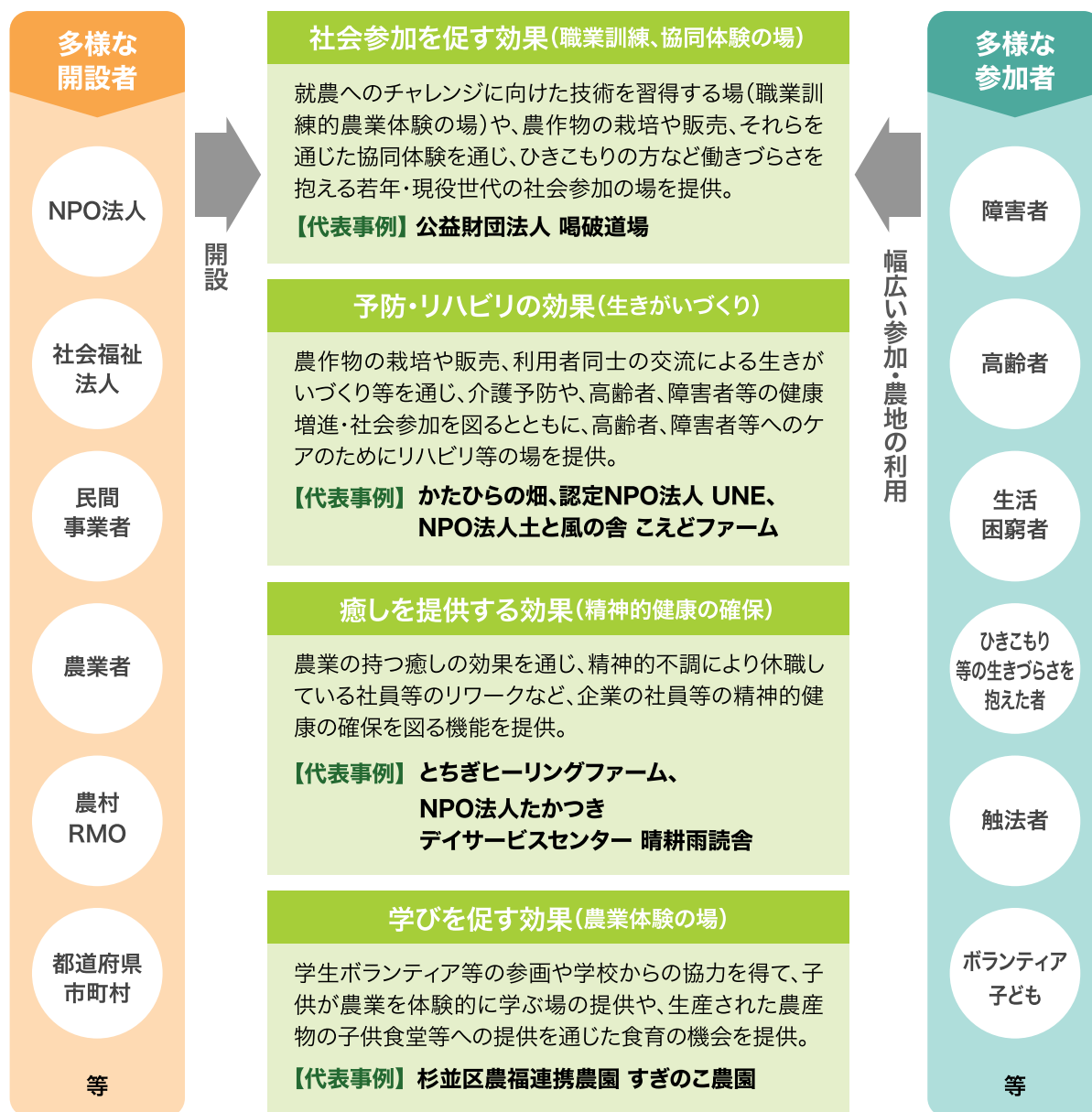


取組の
ポイント

「心が動いて身体が動く」自己選択を
尊重し生きがいと日常をつくる
園芸療法型ユニバーサル農園



ユニバーサル農園の見込まれる効果





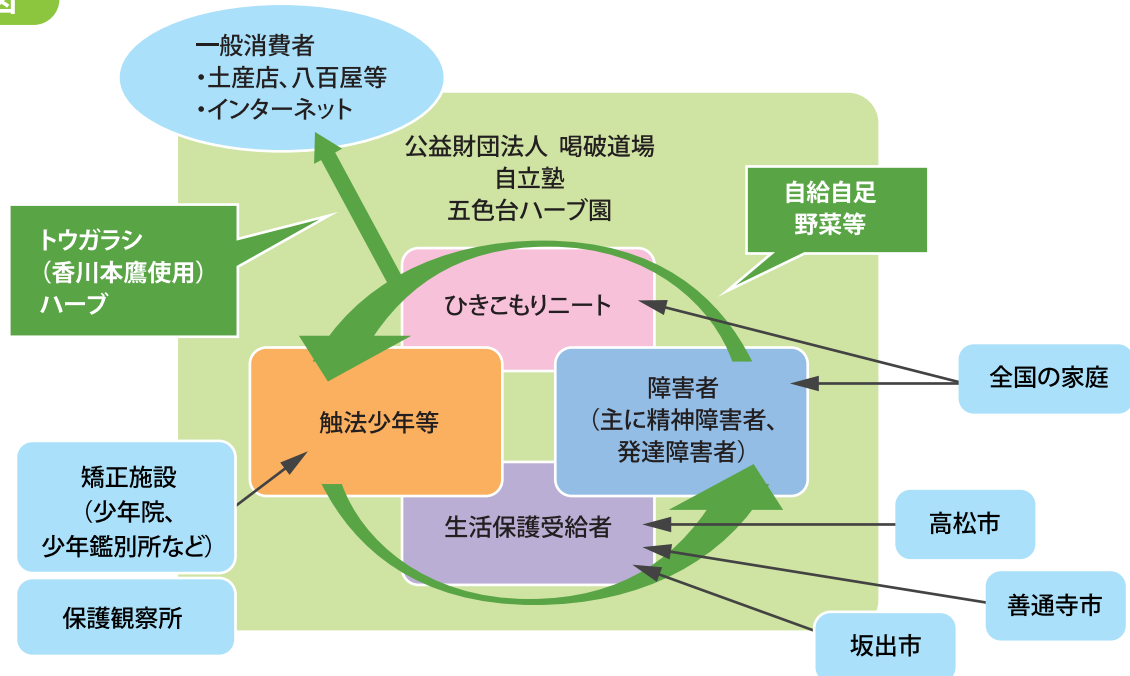
公益財団法人 喝破道場



■所在地：〒761-8004 香川県高松市中山町1501-9
 ■連絡先：TEL.087-882-4022
 ■メール：kappa@kappa.or.jp
 ■公式サイト：https://www.kappa.or.jp/
 ■主な栽培作物：
 ハーブ、トウガラシ、ダイコン、キャベツ、ハクサイ、
 ブルーベリー、ウメ、スモモ など

■規模(面積)：約 1 ha
 ■イベント：
 企業研修、魚釣り、海水浴、餅つき、お花見、BBQ など
 ■表彰・受賞歴：
 第13回正力松太郎賞受賞、キワニス社会公益賞受賞、
 第42回仏教伝道文化
 ■視察受入：可 ■取材受入：可

体制図



取組の概要

瀬戸内海国立公園五色台にある公益財団法人喝破道場の自立塾は、高松郊外に位置し、法人の経営理念である「喝破五訓」と「四恩（父母の恩、社会の恩、故郷の恩、大自然の恩）」の教えを基に、禅の暮らしを取り入れた合宿形式の自立支援を行っている。就労意欲や就学意欲を失いかけている人や、生活リズムが乱れている人、自信を失ってしまった人、環境を変えてもう一度チャレンジしてみたい人、土に触れ野菜やハーブを育ててみたい人など、年齢性別を問わず幅広い人々を対象として受け入れている。

禅の修行の一環として、自給自足の畑仕事を開始し、現在では事業として農業を発展させている。五色台ハーブ園では、多種のハーブの生産から加工、販売までを行っている。ハーブのほか、トウガラシやダイコン、キャベツなどの野菜も栽培している。



取組の効果

- ・瀬戸内の温暖な気候と潮風を受ける農園において、無農薬かつ無化学肥料で一つひとつ丁寧に栽培される貴重なハーブを、「禅ハーブ」としてブランド化している。地元の土産店などでの販売に加え、インターネット販売にも力を入れている。また、かつて絶滅が危惧されたトウガラシ「香川本鷹」を生産することにより、地場特産品の復活に貢献している。
- ・自立塾では現在、およそ10人の塾生を受け入れている。豊かな五色台の自然や日本の伝統文化に恵まれた環境の中で、生きづらさを抱える若者などに対して、居場所を提供しながら生活習慣の改善や就労訓練を支援している。
- ・生活保護受給者の受け入れについては、就労準備支援事業として、2014年より善通寺市、2015年より高松市、2016年より坂出市から生活保護受給者の受け入れを開始し、就労訓練を行っている。また、2022年度には触法少年約7名、刑余者(仮釈放者)約10名、ホームレス3名などを受け入れている。



事例の分析

喝破道場は、ニートやひきこもり、障害者、生活保護受給者、触法少年など、家庭環境や経歴、年齢等が異なる幅広い人々が集団生活を送っているユニバーサル農園である。日々の活動に農作業を取り入れ、香りに「癒し効果」のあるハーブ栽培や体力づくりに役立つ斜面での作業を行っている。五色台ハーブ園での農作業は、心身の成長を促し、多様な人々が活躍していくために重要な土台となっている。



取組のプロセス（画期区分）

きっかけ

現理事長の野田大燈氏は、会社退職後に禅宗僧侶として修行。昭和50年代に、檀家を持たずに自給自足の禅修行と仏教カウンセリングの活動を行っていたところ、不登校の少年を引き受けることとなった。野田氏自身が行う禅の暮らし（座禅、読経、規則正しい生活など）と畑作業と一緒に行ったところ、少年の体力と自信が向上したことに確かな可能性を感じ、このような少年を受け入れるようになった。

1974年～

- 「かつば道場」発足
- ・1975年、宗教法人「五色台報四恩精舎」設立。
- ・1976年、研修を開始。大型バスを改造した坐禅堂の坐禅と、農耕や原野の開墾を主にした研修に取り組んだ。この時の参加企業は今も研修を継続中。
- ・1978年、触法関係の少年の受け入れが始まる。
- ・1978年以降、錬成道場（坐禅堂）、女子寮・浴場、研修道場（プレハブ仮設）、男子寮、製パン工房などの施設が順次整備される。
- ・1983年、里親登録とともに、里子第1号を受け入れる。
- ・1984年、財団法人喝破道場設立。財団法人への移行に伴い、家庭裁判所の補導委託先として登録され、触法少年などの受け入れを本格化。
- ・1989年、道場と支援者を結ぶ「喝破だより」のため印刷機購入。喝破道場出版部は、内容の拡充に取り組む。
- ・同年、青少年の育成強化功労者に贈られる「正力松太郎賞」および、精神的価値を重視するキワニスクラブから「社会公益賞」を受賞。
- ・同年、研修棟が完成。社会人教育の場として設備を整備し、研修の受け入れを強化。

2007年～

- 厚生労働省委託事業「若者自立塾」開塾、五色台ハーブ園・ハーブカフェ「ゼルコバ」開園
- ・時代の変化と共に、受け入れる人々も変化。ひきこもりや不登校の子どもたち、ニートが次第に増えていく。
- ・集中力に課題を抱える少年が、ハーブ栽培に取り組んでいるときは持続的に作業ができることが判明した。ハーブの香りによる「癒しの効果」に着目し、生きづらさを抱えた人々の自立支援にハーブ栽培を中心に取り組むようになる。

2011年～

- 公益財団法人の認可を受け、公益財団法人 喝破道場 に移行
- ・2009年、厚生労働省委託事業「若者自立塾」は事業仕分けにより廃止。その後、独自に「自立塾」を開塾し、塾生の受け入れを継続。
- ・曹洞宗の大本山・越前永平寺で3年半修行を積んだ野田大燈氏の息子、野田大然氏が「自立塾」塾長になり、生きづらさを抱えた人々の支援を継続。
- ・就労準備支援事業として、善通寺市（2014年）、高松市（2015年）、坂出市（2016年）から生活保護受給者を受け入れ、彼らに就労訓練を提供している。
- ・2021年に農林水産省委託事業「開花塾プロジェクト」を開始。共同生活や農作業を通して、生活や心身の立て直しを行う自立塾のノウハウを活かし、就農を目指すプログラムを立案。

今後の展望

目指す将来像 ▶

常に弱者の立場に立ってその自立を促すために、禅カウンセリングと自給自足の共同生活を継続し、利用者が一般人と変わらぬ給与が得られるような事業体を目指す。

今後の予定や計画 ▶

- ・農産物の販路拡大：インターネット販売等の販路拡大による収益増加。農産物等の販路拡大と収益増加によって、①受け入れ期間の長期化、②職員や支援体制の増強、③農地拡大を図っていく。
- ・地産地消への貢献：山で採取できる真竹やサヌカイト、クロモジを利活用し、地域資源の価値創造を図っていく。





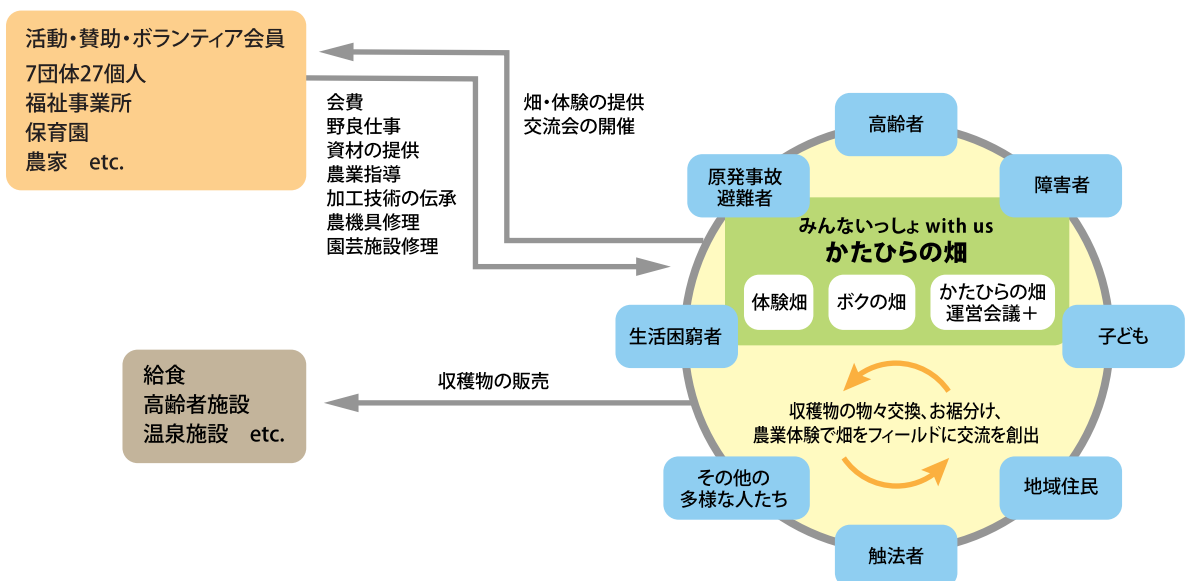
かたひらの畑



- 所在地: 〒963-0211 福島県郡山市片平町北蛇光42
- 連絡先: TEL.090-3648-1470 (和田携帯)
- メール: koriyama.hatake.p@gmail.com
- 公式サイト: <https://katahiranohatake20.wixsite.com/my-site>
- 主な栽培作物: 小玉スイカ、つる紫、玉ねぎ赤と黄色、山芋、アスパラガス、コカブ、茗荷、ヘチマ、自生セリ、ブロッコリー、ニラ、トウモロコシ、ニンニク、白胡麻、サツマイモ、ジャガイモ、里芋、菊芋、絹さや、スナップエンドウ、ニンジン、グリーンリーフレタス、バジル、キュウリ、唐辛子 など

- 規模(面積): 約54a
- イベント: 収穫体験や加工体験、かたひらの畑活用会議プロジェクト+ など
- 視察受入: 可
- 取材受入: 可

体制図



取組の概要

福島県郡山市にある「かたひらの畑」は、2019年に和田庄司氏が立ち上げたユニバーサル農園である。和田氏は1992年に無認可作業所ににんじん舎を設立し、1995年からにんじん舎かたひら農場を開設して農業を始めた。2019年、にんじん舎の事業整理のため、かたひら農場の閉所が決定した。「障害のある仲間たちと共に耕し続けたこの場を無くしたくない」という強い思いのもと、にんじん舎を退所した和田氏が農場を引き継ぎ、「かたひらの畑活用会議プロジェクト」を開催して農場の活用方法を考える場を設けた。そして、2019年に障害の有無や年齢、社会的背景など関係なく誰もが対等な立場で参加できる農園を作るために、かたひらの畑をフィールドにしたプロジェクト「みんないっしょ with us」の立ち上げに至った。

「かたひらの畑活用会議プロジェクト」での議論やこれまでの活動を通して、現在かたひらの畑は主に3つの柱で活用されている。

・ボクの畑

任せられた区画で「みんないっしょ with us」の活動会員が野菜を育て、収穫まで行う。自分が作りたい野菜を植えることができ、余った収穫物をお裾分けをする豊かな農と食を応援する取組。

・体験畑

地域の保育園や高齢者施設等の団体、グループ、個人のためのフィールドとして畑を活用。植え付け・収穫や焼き芋・漬物づくりなどの体験を通じて、農と人と食のつながりを応援する取組。

・かたひらの畑活用会議プロジェクト+

農と人と食をつなぐために先人のそれぞれの思いや技術を、みんなで学び、楽しむ取組。以下、3つのプロジェクトがある。

- ①+学…次世代に引き継ぎたい農業に関する勉強会
- ②+伝…受け継がれてきた食の知恵を伝える場づくり
- ③+結…農業の協働や収穫物の料理会を通じた交流会



芋掘りと焼き芋体験

取組の効果

老若男女、様々な団体が活動・賛助・ボランティア会員として7団体25個人(2022年度)が登録しており、「かたひらの畑」をフィールドに自然な交流が積み上げられている。

地域の学校や障害者福祉サービス事業所、保育園、放課後デイサービス、就労体験者などがトウモロコシの収穫、芋掘り等の体験に訪れるなど、多様な人々が包摂された農園となっている。また、かたひらの畑は好きな時間に好きな過ごし方ができるため、農を通じた多様な人々の居場所として活用されており、農繁期はひと月に約50人を越える対流人口を生み出している。



事例の分析

かたひらの畑は、取組の維持に必要最低限の資金のみを、活動・賛助会員からの会費や、高齢者施設、温泉施設での置き売りや、保育園の給食食材などへの野菜の販売で得ている。それ以外の野菜や加工品は現金化せず、必要とする人たちにお裾分けをしたり利用者間で物々交換をしたりしている。つまり、社会的背景の異なる多様な人々を受け入れる農園として、金銭的な利益よりも、農と人、そして人と人のつながりを生み出すことを目的に農園を運営しているといえる。

農の持つ多面的な機能を用いて、社会的困難を持つ人でも共に支え合い、分かち合える畑が形成されており、「あんたが居ないと困るんだよ」と言い合える関係性を生み出している。



取組のプロセス（画期区分）

1992年

和田氏が無認可作業所ににんじん舎を設立。

1995年

障害のある方々の家族からの相談をきっかけに、力を持って余す障害者らとにんじん舎かたひら農場で農業を開始した。

2019年～

にんじん舎の事業整理に伴いかたひら農場の閉所が決定。
活用方法の検討と「みんないっしょ with us」の立ち上げ。

- 和田氏が畑を引き継ぎ、農場の活用方法を検討する「かたひらの畑活用会議プロジェクト」を主催。
- かたひらの畑をフィールドに、障害の有無や年齢、社会属性にとらわれない、誰もが参加できる農園を目指した取組「みんないっしょ with us」を立ち上げる。

2020年～

- 活動の広がり
- 「ボクの畑」「体験畑」「かたひらの畑活用会議プロジェクト+」の3つを柱に活動を行い、地域の児童や高齢者、障害者を中心に多様な人が訪問し交流する場が創出されている。
 - 収穫物のお裾分けや物々交換を大切な価値観とし、農を通じて支え合う関係性の構築を行っている。

今後の展望

目指す将来像 ▶

「迷惑をかけあえることが大事だよ」とみんなが思える農場へ。

今後予定している取組 ▶

- 畑キャンプの開催
電気や水や食料を自給できる体制を整え、災害時に避難が難しい人の受け入れ態勢を強化していく。
- 本格的畑レストランの展開
本格的な料理を畑で行えるように、キッチンカーを活用した畑レストランを展開していく。
- 畑マーケットの充実
欲しい野菜を欲しいだけ畑から買うことのできるマーケットとしての機能の充実。





認定NPO法人UNE



■所在地:〒940-0242新潟県長岡市一之貝869番地

■連絡先:TEL.0258-86-8121 FAX.0258-86-8131

■メール:une_aze@yahoo.co.jp

■公式サイト:<https://une-aze.com/>

■主な栽培作物:

コメ、各種露地野菜、クロモジ

■規模・面積:

・コメ(大正餅、農林1号、コシヒカリ、亀ノ尾):1.4ha

・どぶろく(4号瓶500本):年間3,000本醸造

・クロモジ(薬用酒メーカーに出荷(生薬)):3t

■イベント:

・山をフィールドにしたイベント:山菜採り体験、クロモジ採り体験、キノコ狩り体験、水路探検掃除体験等

・ユニバーサル農園OasisRでのイベント(年6回程度開催。種まきや収穫等農作業の他、農業や信濃川について学ぶ):種まきと定植、農業のお話、ハロウィン南瓜定植と信濃川のお話、野菜の定植とストーンアート、収穫体験と流しうどん、野菜の定植と農業のお話、収穫体験と畑じまい等

・どぶろく醸造体験イベント等

■表彰・受賞歴:

・2019年2月7日

全国どぶろく研究大会 優秀賞(濃芳醇の部)受賞
(全国どぶろく研究大会実行委員会 岩手県遠野市)

・2021年3月12日 ノウフクアワード2020優秀賞

・2022年2月17日

全国どぶろく研究大会 入賞(濃芳醇の部)受賞
(全国どぶろく研究大会実行委員会 愛知県大府市)

・2023年1月13日

全国どぶろく研究大会 入賞(濃芳醇、淡麗の部)、W受賞(全国どぶろく研究大会実行委員会 秋田県北秋田市)

■視察受入:可

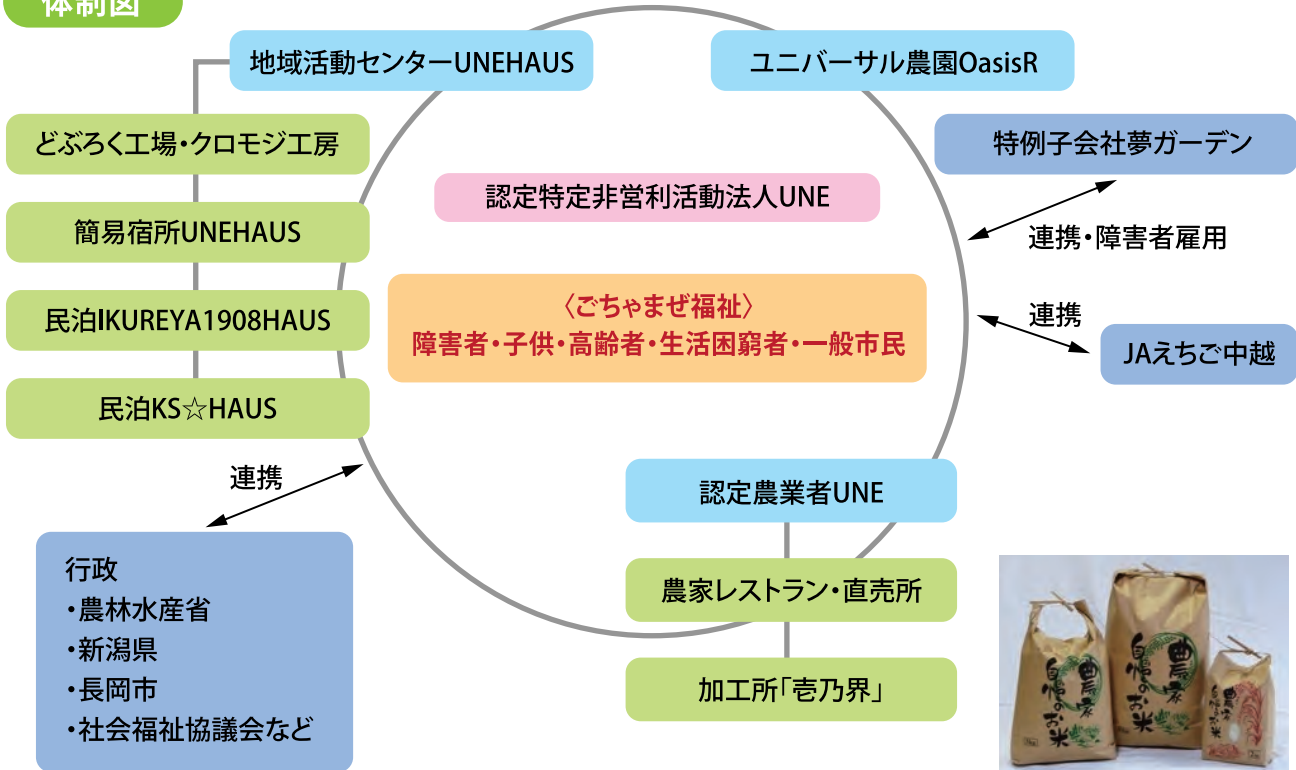
■取材受入:可



取組のポイント

できることを仕事にするごちゃまぜ福祉
～ユニバーサル農園とは「誰でも受け入れること」～

体制図



取組の概要

認定特定非営利活動法人UNEは、農園芸作業などを通じ、長岡市内及び周辺在住の障害者、高齢者が人間らしく、誇りをもって自立し生活することを支援し、一生安心して暮らせる社会の構築を目指し活動している。「UNE」は、U(Universal)N(農園芸)E(越後)の略であり、「越後で農園芸を通して国籍も性別も年齢も障害の有無も超えてみんなが働ける、持続可能な地域づくりを」という家老代表の思いが込められている。「やりたい仕事をしてもらう。自分でできる事を仕事にする」をモットーに、露地野菜の生産や稲作、ユニバーサル農園「OasisR」や農家レストラン「UNEHAUS」、加工場や農家民宿等の運営、どぶろく雪中壺乃界の醸造、クロモジ茶・クロモジスト(エッセンシャルオイル)の生産、造園業者などからの請負、交流、送迎、情報発信など、12の事業に取り組んでいる。これまで障害者、生活困窮者等8名が就労。「ユニバーサル農園とは?」という問いに家老代表は「誰でも受け入れるということ」と熱く語る。



農家レストランUNEHAUSでの昼食の様子



どぶろく「雪中壺乃界」



取組の効果

- UNEに来ることで、独居でひきこもりがちの高齢者や生活困窮者は外出する機会を得ることができ、その結果、健康や体の機能維持にも役立っている。
- 2013年2月、NPO法人として県内初の認定農業者となり、中山間地域の担い手となっている。
- ボランティアメンバーの増加に伴い、UNEHAUSやイベントへの来客と売上が増えている。
- 高齢のボランティアや生活困窮者が障害者に仕事の方法を教え、障害者がスキルを習得する。また、ボランティアが困っているときには、障害者が助ける。「誰でも受け入れること」でGIVE&TAKEの関係性が構築され、助け合いの循環が醸成されている。
- 古来種の「亀ノ尾」を原料としたどぶろく製造など、付加価値のある商品づくりを推進。
- 採取農業にも力を入れ、自生している笹やヨモギ、クロモジなどを採取・調整・加工し、直接、商社やメーカーに販売。
- UNEでは「ノウフクレート」という指標を作り、各作業を記録している。計算方法は、「利益(売上ー経費)÷総労働時間/人数」。つまり、作業単価のことである。これに基づいて、各作業の優先度を判断し、効率的な作業計画を策定することができる他、対外的な指標としても活用できる。最低賃金水準を目指して取り組んでいるが、2022年にヨモギの採取や加工等の作業レートを時給1,600円以上まで向上させることができた。
- ノウフクレートが時給500円以上の作業を「ノウフクジョブ」として定め、以下を定義としている。「①誰でもできる」、「②沢山(大勢の人)で出来る」、「③みんなでやれば楽しくなる」。この定義に基づいてノウフクジョブを選定することで、誰でも作業に従事できることに加え、楽しい仕事であることから、人が集まり、人口減少が進む集落の活性化に貢献することができる。



事例の分析

UNEは、地域で暮らす障害者、生活困窮者、高齢者、一般市民とともに様々な取組やイベントを展開し、中山間地をフィールドにまぜこぜな場づくりや農業体験等を実施している点において、まさに中山間地でのユニバーサル農園のモデルケースと言える。今後は触法者や外国難民なども参画できるユニバーサル農園を整備し、「互いに支え合うコミュニティ」の醸成を図っていくことで、中山間地域のみならず社会・世界全体の課題解決を目指す。



UNEに滞在し農作業や販売などを手伝っているドイツ人のエリアスさん



取組のプロセス（画期区分）

きっかけ

UNEの活動は2009年、長岡市千秋が原信濃川河川敷の畑で始まった。これは、障害者、健常者、若者、年配者など、あらゆる人々が一緒に畑で野菜を作り、それを販売することで工賃を得ようという取組であった。しかしながら、農業経験も機械もない状況では、品質が備わった十分な量の野菜を収穫することが困難であり、充実した工賃を稼ぎ出すことができなかった。そこで、価格が安定しているコメの栽培を開始することに決定。以来、UNEは地域資源や状況を考慮しながら、柔軟に農業に取り組んでいる。

2008年～

「皆と一緒に作業することで相互理解を深め、ユニバーサルな社会を構築する」ことを目指して活動が始動。

- ・2008年、ユニバーサル農園芸えちご設立。長岡市千秋が原信濃川河川敷の畑にて活動開始。
- ・2011年4月1日に地域活動支援センターUNEHAUS開設。25日にNPO法人UNE設立。
- ・2012年、加工場壺乃界を開業。
- ・農業参入した後、NPO法人として県内初の認定農業者となる。
- ・2013年、農家レストランUNEHAUS開業。

2015年～

どぶろく製造開始。

- ・2015年6月に酒類販売許可取得。10月、長岡市のどぶろく特区事業を活用し、その第1号蔵として製造免許を取得、翌月から日本初の米粉どぶろくを醸造し、販売。
- ・2015年10月、クロモジ事業開始。
- ・2016年3月、河川協力団体認可取得（国土交通省北陸地方整備局）。
- ・2016年11月、UNEHAUS簡易宿所営業許可取得。
- ・2017年3月、酒類販売免許条件が緩和し、酒類ネット販売許可取得
- ・2018年5月、クロモジ工房がオープンし、クロモジ茶、エッセンシャルオイルの製造を開始。
- ・2018年6月、K S ☆ H A U S 民泊営業許可取得。
- ・2018年9月、無人航空機の飛行に係る許可を取得。

2018年～

ヨモギ事業を開始。事業内容の一層の拡充に取り組む。

- ・2019年2月、全国どぶろく研究大会 優秀賞（濃芳醇の部）受賞（全国どぶろく研究大会実行委員会 岩手県遠野市）。
- ・2019年3月、長岡市第1号の認定NPOに認証。
- ・2020年9月、新潟県優良農業経営体等表彰 第1回農福連携の部 新潟県農業会議会長賞受賞（新潟県農業会議）。
- ・2020年4月、「IKUREYA1908HAUS」（古民家）運営開始。
- ・2020年9月、家老代表が農福連携技術支援者に認定される。
- ・2021年2月、キッチンカー「畝家」開業（農林水産省経営継続補助金活用）。
- ・2021年3月、ノウフク・アワード2020第1回優秀賞受賞（農林水産省）。
- ・2022年2月、全国どぶろく研究大会 入賞（濃芳醇の部）受賞（全国どぶろく研究大会実行委員会 愛知県大府市）。
- ・2022年5月、「IKUREYA1908HAUS」民泊営業許可取得。
- ・2023年1月13日、全国どぶろく研究大会 入賞（濃芳醇、淡麗の部）W受賞（全国どぶろく研究大会実行委員会 秋田県北秋田市）。

今後の展望

目指す将来像 ▶

金のかからない農業・福祉の再構築を通じて、多くの人々が生き甲斐や楽しい居場所を見つけることができるよう、地に足のついたしごと（農業）を見直し、新たな社会を農福連携で再構築する。

今後の予定や計画 ▶

- ・障害者、生活困窮者等の就労の場として、特例子会社の誘致に取り組む。
- ・グループホームを整備し障害者・生活困窮者等の生活の基盤を作る。
- ・障害者・生活困窮者の就労の場として、就労継続支援B型事業所を立ち上げる。





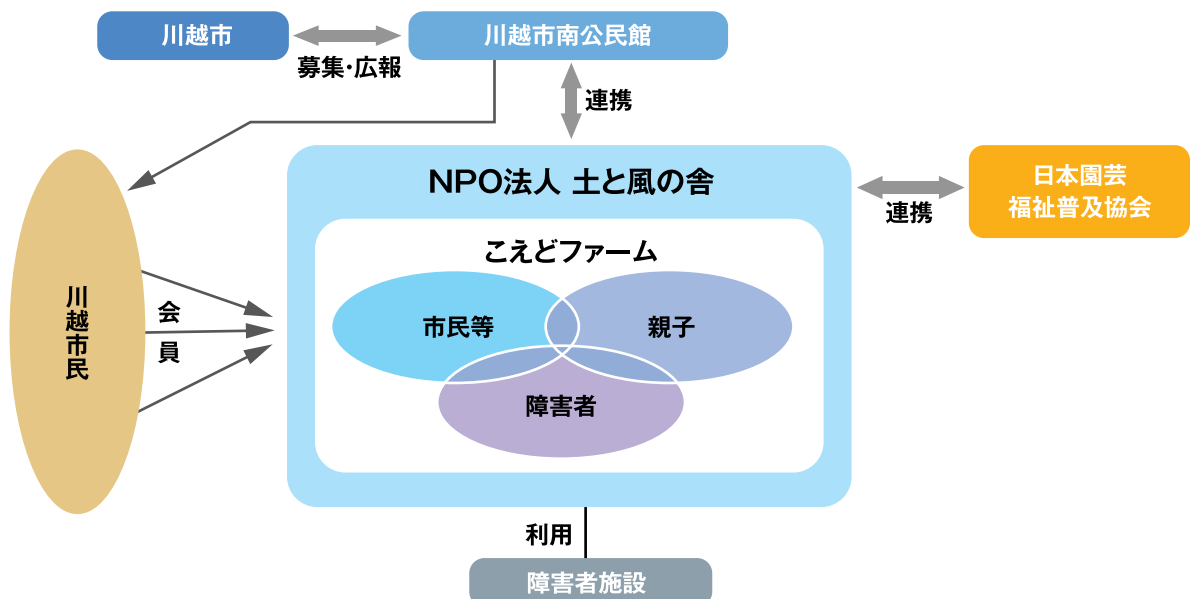
NPO法人土と風の舎 こえどファーム



- 所在地:〒350-1124 埼玉県川越市新宿町6-14-10
- 連絡先:TEL.049-248-9485 FAX.049-248-9486
- メール:tutitokaze@arion.ocn.ne.jp
- 公式サイト:https://www.tutitokaze.com/
- 主な栽培作物:有機無農薬の野菜50種類、果樹(カキ、クリ、ブルーベリー、イチジク、リンゴ、ブドウ)、小麦、マメ類、キノコ、ハーブ、山菜など
- 規模(面積):約80a

- イベント:旬を食べる会、収穫祭、もちつき大会、味噌・こんにゃくづくり、ソバ打ち、竹林整備、市民農園訪問・農業体験ツアー、県政出前講座、草木染め、クラフト
- 表彰・受賞歴:
 - 2016年 川越市社会福祉大会感謝状授与
 - 2021年 川越市社会福祉大会会長賞受賞
 - 2022年 川越市市制施行100周年記念特別感謝状授与
- 視察受入:可 ■取材受入:可

体制図



取組のポイント

子供・大人・お年寄り・障害者などの「ごちゃまぜ体験農園」

取組の概要

こえどファームは、障害や世代、立場を超えあらゆる人がごちゃ混ぜになって農を楽しむことができる参加体験型の農園である。種まき・水やり・草取り・収穫といった農作業全般を通じ、人と人、人と自然との触れ合いを深め、植物の成長とともに季節感・実りの喜び・食べる楽しみ・料理やクラフトの面白さなどを体感できる。農園では、親と子の農業・自然体験、障害者の農業実習・就労訓練、市民の農業体験やハーブ活用講座など、農を通じたさまざまな活動を展開している。



取組の効果

・市民向け農業体験講座「畑をみんなで楽しもう！」

週2回活動しており、年会費6,000円で利用できる。現在、登録者数は50名・1団体で、通常およそ30名が参加。自らが「楽しそう、やってみたい」と思うものを無農薬・無化学肥料で栽培している。農業技術に関する指導者はいないが、お互いが自主的に学んだり、農園で積極的に試したりすることで多品目を栽培する。また、農作業以外にも、親睦イベントや他県への視察・交流会など、数多くのイベントが行われ、地域コミュニティとしての機能を果たしている

・親子向け農業体験「親子で畑で遊ぼう！」・ハーブ栽培活用講座「畑でハーブを育てよう！」

毎月1回土曜日に活動が行われ、年会費6,000円で利用できる。なお、親子向け農業体験は1家族当たりの会費である。現在、親子向け農業体験は親子46組、ハーブ栽培・活用講座は30名が登録している。ハーブ栽培活用講座では、農薬・化学肥料に頼らずハーブを栽培しており、仲間とともにその魅力を味わうことができる。また、それぞれの利用者同士の交流も盛んである。

・障害者の受け入れ

障害者の農業実習・就労訓練事業「アグリチャレンジ」において、のべ4人の障害者が農業分野あるいは非農業分野に就職した。市民向け農業体験講座には、これまで障害者8名が参加したほか、7つの障害者施設・支援組織から障害者を受け入れた（児童・生徒含む）。そこでは、1回だけ農業体験に来る人や継続的に参加する人など様々である。現在は、毎月1回ほど2～3名が農業体験に訪れる。



事例の分析



こえどファームでは、区画のない農地において、障害や世代、立場など、あらゆる垣根を越えて、多様な人々が農作業やイベントを楽しんでいる姿が見られる。多様な地域コミュニティが集う場としての機能を果たし、このようなユニバーサル農園の実現には、困ったらお互いに助け合うという参加者同士の規範の醸成、利用者や要望等の特性に合わせ段階的に受入環境を変えていった20年間の歴史、そして、園芸福祉の思想が背景となっている。

取組のプロセス（画期区分）

きっかけ

NPO法人「土と風の舎」の代表理事渋谷雅史氏は、農園芸活動を通して人々がより良く生きていけるのではないかと考え、園芸福祉活動を開始。当時、埼玉県で開催された彩の国・癒しの園芸活動指導者養成研修およびサポーター養成研修の修了生の有志と共に「土と風の舎」を設立し、埼玉県内の「園芸福祉の実践と普及」を目的に活動を開始した。

2002年～

土と風の舎設立 こえどファーム開園

- ・川越市下小坂の畑地約20aを借り、活動が始まる。
- ・高齢者との農業体験を始める。
- ・2003年には、NPO法人として埼玉県から認証される。
- ・2007年に農園拡張が行われ、ハーブ園を開設し、ハーブの栽培を開始した。
(2010年よりハーブ栽培活用講座を実施)

2007年～

障害者の農業実習・就労訓練を開始

- ・2007年、農園芸による障害者就労支援事業を立ち上げる。2008年に先進事例の現地視察を行った後、障害者就労支援事業「みどりの架け橋」の取組を開始。
- ・2012年には、精神障害者や発達障害者を対象とした農業実習・就労訓練事業「アグリチャレンジ」を開始。農園芸活動を通したリハビリテーションや職業訓練など、様々な支援モデルカリキュラムを開発・提案。
- ・就労支援に関するセミナーや勉強会を開催。
- ・2013年、「農園芸による精神障がい者のための効果的な訓練の実施にむけて」を発行。
- ・2014年、「農業における障がい者就労支援のためのガイドブック(精神障がい者・発達障がい者編)」および「現場で活かせる障がい者就農Q&Aハンドブック～精神障がい編～」を発行。

2011年～

参加者に合わせ、段階的に受入環境を整備

- ・2011年、2013年、2014年、2021年に農園拡張が行われる。
- ・2012年にバイオトイレが完成。
- ・2013年に休憩所が完成。
- ・2014年より竹林整備が始まる。



今後の展望

目指す将来像 ▶ 一人ひとりのwell-beingを実感できる農園

今後予定している取組

- ・10年、20年先の園芸福祉を担っていく人材を育てることに注力していく。
- ・まだ計画段階に至っていないが、将来的には、中学生、高校生、大学生等、若者に対するファームの体験活動の促進と園芸福祉講座の開催を目指している。



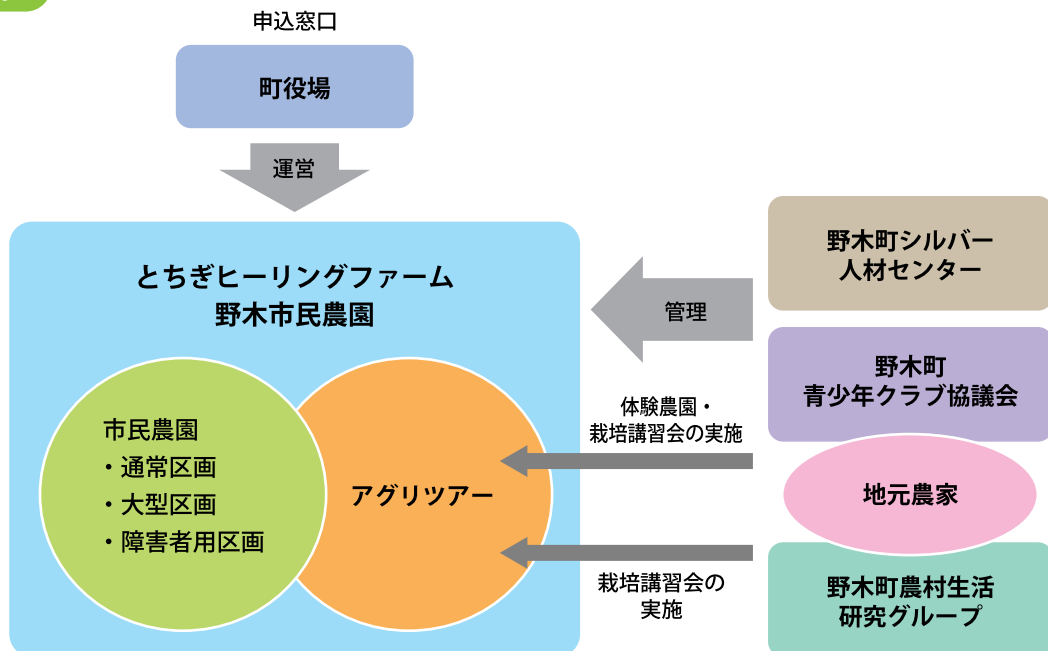


とちぎヒーリング・ファーム



- 所在地: 〒329-0101 栃木県下都賀郡野木町大字友沼5557番地1
- 規模(面積): 約1.2ha(農園、山林含む)
- 連絡先: 野木町 産業建設部 産業振興課 農業振興係
- イベント: 栽培講習会、体験農園 (さつまいもの収穫体験) など
- メール: sangyou@town.nogi.lg.jp
- 視察受入: 可
- 公式サイト: <https://www.pref.tochigi.lg.jp/g01/work/nougyou/shokutonou/h24universal01.html>
- 取材受入: 可
- 主な栽培作物: 利用者が希望する作物を栽培

体制図



取組の概要

栃木県では、体験メニューやプログラム、設備面を工夫し、農が持つ効果をより一層発揮できる体験農園を、癒しと触れ合いの体験農園「とちぎヒーリング・ファーム」として勧めている。2018年には、野木町市民農園を増設し、栃木県のヒーリング・ファーム第1号としてリニューアルオープンした。

前身の野木町市民農園では、町民に農産物の栽培および収穫を通して自然とふれあう機会を提供することにより、健康でゆとりある余暇活動を推進してきた。2017年に、県が推進する「とちぎヒーリング・ファーム」の理念を導入し、バリアフリー化や障害者用区画の増設等の工事を行うことにより、障害者や高齢者など、さらに幅広い人々が農の持つ効用を受け取れるように配慮した。野木町民は通常区画を年間6,100円、大型区画を年間10,200円で利用することができる。なお、障害者は障害の程度により半額または全額減免となる。



取組の効果

- 全部で90区画あり、現在ほとんどの区画が埋まっている。農園の利用者の中には、10年近く利用している人もおり、農園での活動は彼らにとって生活に欠かせない重要な役割を果たしている。
- 農園の利用者は、自身が作りたい作物を栽培している。隣の区画同士で農業技術を教え合う姿や遊びに来た子供たちに野菜をあげる利用者の姿も見られる。
- 障害者用区画を4区画設置している。障害者用区画では、社会福祉法人と個人申請のあった障害者が利用している。
- アグリツアーとして、さつまいもの収穫体験や栽培講習会などの体験プログラムを実施。これらのイベントは、利用者同士や利用者と農業者の交流促進、さらには利用者の栽培スキルの上達に貢献している。
- 栃木県では、ユニバーサル農園に対する認知向上のため、ユニバーサル農業推進シンポジウムを開催するほか、ユニバーサル農園の運用例をまとめた冊子『癒やしと触れ合いの体験農園「とちぎヒーリング・ファーム」のすすめ』を発行したり、Facebookページ「とちぎユニバーサル農業」を開設している。まずは、ユニバーサル農業について知ることから始め、できることから取り組んでもらえるように促している。



事例の分析

とちぎヒーリング・ファームでは、増設工事による交流広場の整備や四阿(あずまや)の設置により、休憩時に利用者同士で栽培情報を交換するなどの交流が生まれている。さらに、園路幅拡張や立ち上がり式花壇(レイズドベッド)を設置するなど、バリアフリー化に配慮することで、障害者や高齢者、ファミリーなど、誰もが都市農業・市民農園の持つ多面的機能を享受できるよう整備されている。このような広域自治体が運用を促し基礎自治体が実践するという過程は、行政主導のひとつの理想的なユニバーサル農園の実践事例であると言える。



取組のプロセス（画期区分）

きっかけ

県では農業振興計画「とちぎ農業進化躍動プラン（県プラン）」の中で「誰もが取り組み、親しめるユニバーサル農業の促進」を進めており、ヒーリングファームもその取組の一環であった。そこで、野木町が市民農園の整備を行いたいタイミングと県農政部で事業活用を検討していたタイミングが合ったことから、野木町の市民農園と連携し、開園することとなった。

2012年～

野木町市民農園 開園

- ・市民農園を全44区画からスタート。
- ・野木町では、遊休農地の活用、町民の健康づくり及び余暇活動のために、2012年に市民農園を開設。

2018年～

県が推進する「とちぎヒーリング・ファーム」第1号として、とちぎヒーリング・ファームがリニューアルオープン

- ・県のユニバーサル農業の補助事業「栃木県単独農業農村整備事業」を活用し、財源を確保することによって増設。

<とちぎヒーリング・ファーム開園に向けた整備ポイント>

- ・90区画に増加。障害者用区画を設置。
- ・水道の整備。
- ・園路を区画周囲まで舗装。
- ・四阿の設置。
- ・レイズドベッドの設置。
- ・ベンチの設置。
- ・おむつ交換台のあるトイレの設置。
- ・自由に使える農機具、耕運機などの貸出。
- ・交流広場の整備。

今後の展望

目指す将来像 ▶

障害者や高齢者など誰もが利用できる農園を継続していきたい。

今後予定している取組 ▶

令和5年度、野木町農村生活研究グループ協議会による「野菜の栽培講習会」を計画している。自宅で簡単に取り組める栽培によって、手軽に農作業の楽しさを享受できることが期待できる。





NPO法人たかつき 「デイサービスセンター晴耕雨読舎」



■所在地:〒569-1051大阪府高槻市原2235番地

■連絡先:TEL.072-689-9112

■メール:information@npo-takatsuki.org

■公式サイト:https://npo-takatsuki.org/

■主な栽培作物:

各種野菜・花・ハーブなど50種類以上(利用者による)

■規模(面積):約10a

■イベント:文化祭(年1回:家族向け)、家族見学会(年1回:家族向け)、自然体験学校(月2回日曜日開催/20名/対象:小学生:自主事業)、さんぼキッズ(月3回木曜日開催/5~10組の親子/対象:2~6歳の未就学児:自主事業)

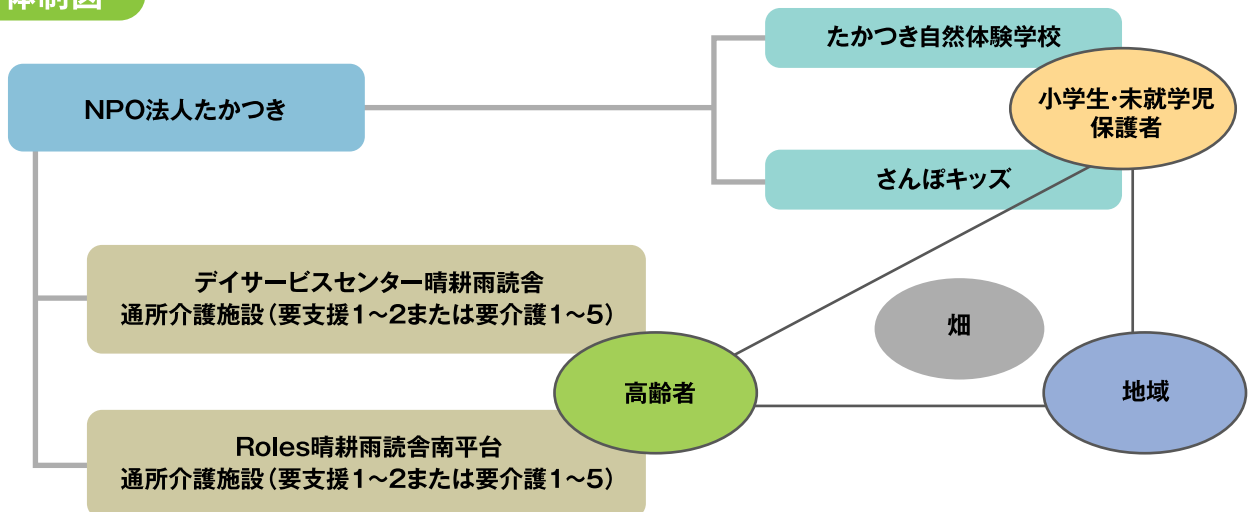
■表彰・受賞歴:

2022年9月 高槻市ガーデンコンクール奨励賞

■視察受入:可

■取材受入:可

体制図



取組のポイント

「心が動いて身体が動く」自己選択を尊重し生きがいと日常をつくる
園芸療法型ユニバーサル農園。

取組の概要

園芸療法を通じて、つくりだすのは、「日常」。

2007年に開所したデイサービスセンター「晴耕雨読舎」は大阪府高槻市にある「畑のある」デイサービス。通所介護施設として質の高い介護サービスを提供するとともに、農園芸や大工仕事、室内での創作活動などを通じて、「生きがい・やりがい・日常」に焦点を当てたサービスを提供している。

デイサービスでは園芸療法の手法が取り入れられており、約10aの畑スペースにはレイズドベッド(地面から立ち上げられた苗床)が配置され、利用者は自分の区画として割り当てられたレイズドベッドで、季節の花や野菜を育てることができる。

作業内容も稲藁の袴取り、わらマルチづくりの為のわら切り、プランターのペンキ塗りなど様々あり、利用者が思い思いの作業を自分で選択して行うことができる。

代表の石神氏は「心が動いて身体が動く」という理念を重視しており、認知症であっても全ての機能が失われたわけではないこと、人や植物や自然の力を媒介にしてご本人の心の中にある意欲を引き出すことで、自然と身体が動くような活動につながるような仕組みを構築している。自己選択を尊重した「普段通りの暮らしにまつわる手仕事」を用意することで、心と身体が元気になり、ひいてはそれが心身機能の維持につながっている。



晴耕雨読舎畑スペースの全体風景



レイズドベッドで作業する利用者



腰の悪い利用者も、意欲的に稲わらの袴を取る作業をしていた



さんぽキッズや自然体験学校等で子供達と高齢者(利用者)の交流を創出



取組の効果

•身体機能の向上

畑では、利用者が目標をたてやすいように10mごとに距離の表示をしたり、「作物の成長を見に行きましょう」と声掛けを行ったりと、利用者が外に出かけたいような支援を行っており、足腰の機能向上につながっている。

•意欲の向上

午前中が主に畑の時間となっており、自分のペースで自分のレイズドベッドに移動し、移植ごてを使って土を柔らかくしたり、雑草を抜いたり、思い思いの時間を過ごしている。畑内にはあちこちにベンチが置かれ、日光浴をしながらおしゃべりする利用者が多い。

デイサービスで栽培した花が自宅の仏壇に飾られることが多く、農作業に関心がない方でも、花の栽培であれば取り組むというケースがある。

•環境整備

レイズドベッド(畑)を活用することによって、かがむことなく作業できるようにしている。車いすのままや歩行器の使用、独歩など移動手段は様々だが、このレイズドベッドはつかまることができるので手すりにもなり、畑内には歩行用の手すりは見当たらない。

•「自己決定」の尊重

利用者が主体的に作業を選択できるよう、利用者一人ひとりのライフヒストリーや興味関心などをしっかりアセスメントして、支援者側の都合ではなく利用者本位の日常を過ごせるような支援を行っている。大工仕事やノコギリを使った作業もあるため、ご家族へ十分に説明を行っている。自己決定した作業を行うことで自身の作業に誇りを持つ利用者も多い。

•活動日誌の活用

毎朝、その日に何をするかを記載する活動日誌を利用者自身で書く時間を設けている。日誌にはその日の天気や自分の体調などを記入することになっており、自分と外に意識が向くよう促しており、認知症予防に効果的である。日誌の裏には写真を貼るスペースがあり、認知症の方が見返した時にその日を回想できるようになっている。家族にとっての活動報告や、本人にとってのアルバムの役割も果たしており、写真をきっかけに家でも家族と会話が増えるなど、副次的な効果がある。



事例の分析

同法人では、「心が動いて身体が動く」ことを重視し、自然を媒介にして「心が動く」活動を支援者と利用者が一緒に考え、実行している。畑には園芸療法の仕掛けが施されており、デイサービスとしての機能訓練にもつなげている。園芸療法という手法がユニバーサル農園を展開していく上でキーワードの一つとなりそうだ。

利用者からは「通い始めた当時の方が動けなかった。野菜の収穫はいつもワクワクするし、子どもさんとの活動も楽しい。」という意見もあった。農福連携によって高齢者の生きがいづくりや居場所づくり、子どもから高齢者まで多世代に渡って交流を創出している点において、ユニバーサル農園の可能性を示してくれる好事例と言える。



取組のプロセス（画期区分）

きっかけ

代表の石神氏は都市緑化を進める企業に勤めていた経験があり、そこで園芸療法に出会った。2000年に「園芸療法を活用し、自分の手と足を使って自然環境問題の改善にも貢献したい」という思いで会社を辞め、高槻の山間部を拠点とした事業を始める準備を開始した。

2001年

法人の設立と活動開始

- ・NPO法人たかつき設立
- ・街かどデイハウス晴耕雨読舎で園芸療法を開始
- ・自主事業で自然体験学校開始

2002年～

園芸療法の普及へ

- ・日本園芸福祉普及協会理事に就任
- ・精神科の病院にて、週3回の園芸療法プログラム実施開始

2007年

デイサービスの開所

- ・デーサービスセンター晴耕雨読舎開所(22名定員)
- ・Roles晴耕雨読舎開所(16名定員)：

Roles晴耕雨読舎南平台では、庭付きの30坪の一軒家でデイサービスを実施している。コンセプトはデイサービスセンター晴耕雨読舎と共有しつつも住宅街に立地しており、都市部でも園芸療法の高齢者デイができることを実証している。「役割=Role」をキーワードに、庭での花や野菜を育てる農園芸のほか、社会貢献活動や創作活動、ヨガや健康和太鼓などの活動を実施しており、デイサービスセンター晴耕雨読舎とはプログラム内容に多少の違いがあるが、同事業所は、都市部でも空き家と庭があれば事業展開できることを示してくれる事例である。

今後の展望

目指す将来像 ▶

高齢者の「Meaningful lifeの探求」をミッションに、誰もが人生の最後まで豊かに生きていける社会を目指す。

今後予定している取組 ▶

- ・法人として新たな施設をつくり、より多くの利用者さんに生きがい、やりがいを持って過ごせる場所を提供していく。
- ・晴耕雨読舎方式の園芸療法を伝えてデイサービスをもっと面白くするセミナーの定期開催をしていく。





杉並区農福連携農園 すぎのこ農園



■所在地:〒167-0021 杉並区井草3丁目19番23号

■連絡先:TEL.03-5303-9835

■公式サイト:

<https://www.city.suginami.tokyo.jp/guide/shigoto/nougyou/1058222.html>

■主な栽培作物:ジャガイモ、サツマイモ、ニンジン、エダマメ、ダイコン、カブ、ミニトマト、ピーマン、レタス、スイートコーン、コマツナ、キャベツなど

■規模(面積):32.4a

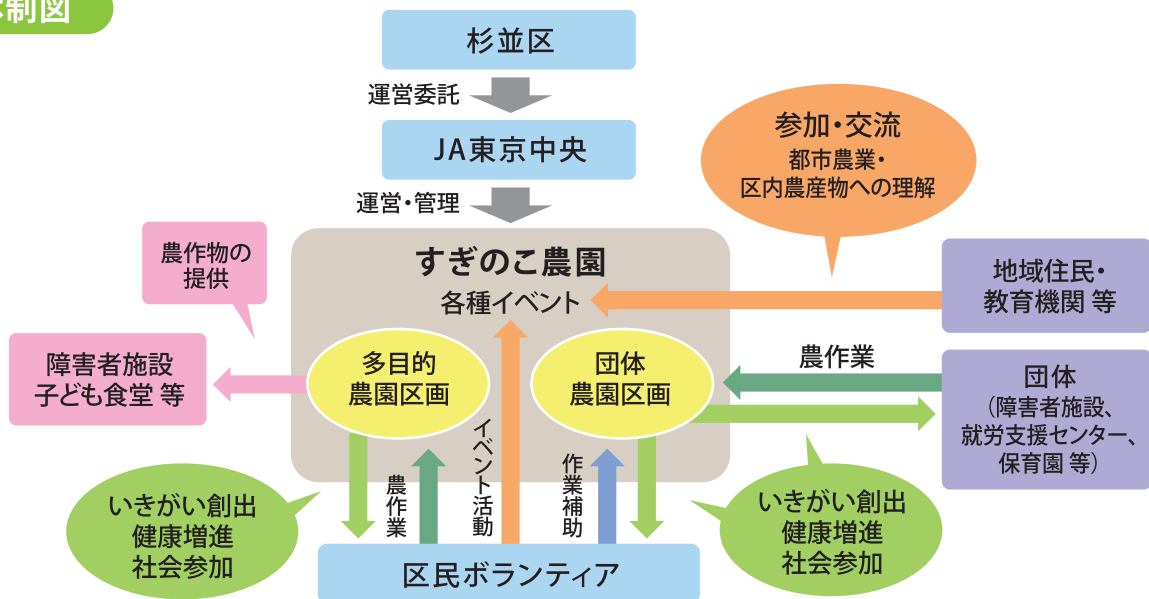
(多目的農園区画:約20a、団体農園区画:約6a)キャベツなど

■イベント:すぎのこマルシェ、収穫体験、食育ボランティアの養成講座(場所貸)、子ども食堂 など

■視察受入:可

■取材受入:可(状況・趣旨等に応じて)

体制図



取組のポイント

多面的機能を活かし、多様な区民が集う、都市農業型農福連携農園。

取組の概要

すぎのこ農園は、農産物の生産に加え、障害者・高齢者等のいきがい創出や食材提供による障害者施設の運営支援、環境保全、防災スペース、地域交流など、様々な機能を発揮する都市農地である。農園は、多目的農園区画と団体農園区画に分かれる。団体農園区画では、いきがい創出や健康増進等を目的に、障害者施設、就労支援センター、保育園などの団体が、JAによる作付け計画などの支援を受けながら農作業を行っている。一方、多目的農園区画では、障害者施設等に提供する農産物を、区民ボランティアの支援のもと栽培しているほか、区民向けの収穫体験スペースも設けられている。区民ボランティアは、多目的農園区画での農作業に限らず、団体利用の補助やイベントの手伝い等を行っており、農園運営の担い手となっている。

農園内には、江戸時代中期に建てられた農家の部材を活用した管理棟を設置し、畑と相まってかつての農風景を再現している。管理棟は、一般公開するとともに、講座など、区民・地域と連携した取組等に利用されている。



取組の効果



- ・区内教育機関や産業団体等と幅広く連携し、交流事業を実施するなど、農福連携事業を効果的に推進している。
- ・管理棟は週1回、障害者施設の利用者が帰宅するまでの間、時間を過ごせる場所として開放している。また、防災兼用農業用井戸を併設するなど、防災機能にも配慮している。

- ・障害者・高齢者等のいきがい創出や健康増進、若者等の就労支援（農園内における中学生等の職業体験含む）、幼児の食育・自然体験など、福祉施策等の実施効果を高める取組を実施している。
- ・20団体以上に作物を提供しており、障害者施設等の運営支援を行っている。
- ・区内農地の活用により、都市農地を保全し、都市型農業の推進に取り組んでいる。
- ・広く区民に農業を体験する機会を提供することにより、都市農地の持つ多面的機能に対する区民の理解を深め、区民とともにつくる農園を目指している。

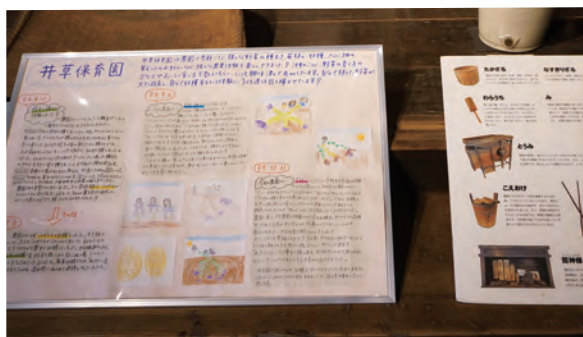


事例の分析

すぎのこ農園では、障害者・児童生徒・保育園児・ファミリーなど、多様な人々が農作業を行えるような施設と体制が整備されている。特に、農業に精通したJA職員と区民ボランティアの存在と協働が大きな役割を果たしている。

また、農園内には利用者の利便性やバリアフリーに配慮した様々な工夫が施されている。例えば、車いすも通れる広い通路や、しゃがむのが苦手な人のための椅子や膝パット、手作業が苦手な人のための道具等が配備されている。

このような細やかな配慮は、杉並区による政策的な主導性と農業のプロフェッショナルであるJA東京中央の連携によって障害者施設と緻密な議論が成されたからであると考えられ、地域ぐるみの「都市農業型農福連携農園」を実現している。



取組のプロセス（画期区分）

きっかけ

同農園は、杉並区が区民農園として区民に貸出してきたが、土地の所有者から売却の相談があった。区では、減り続ける都市農地の有効活用について、以前から検討してきた経緯があり、その活用のひとつとして農福連携事業を考えていた。

2019年 ～2020年

開園準備

- ・事業実施にあたっては、庁内の農業、障害者、高齢者、建築、企画の各部門をメンバーとする横断的な検討会を立ち上げ、障害者団体等の意見も聴取した。
- ・2019年4月から試験的作付けや農園整備（土壌検査、土づくり）を開始。
- ・2019年8月に区民ボランティアの募集を行う。2020年4月より、公募した区民ボランティアが活動を始め、団体農園区画の貸出や収穫物の提供を開始。
- ・農園の運営と農業指導等を、農業に関する専門知識を持つJA東京中央に委託。

2021年～

すぎのこ農園 全面開園

- ・初年度には、19名の区民ボランティアが参加。また、障害者施設、就労支援センター、就労継続支援B型事業所、保育園などの6団体に団体農園区画を貸出。
- ・すぎのこマルシェを開催し、区内農家が栽培した新鮮な野菜や花、区内の障害者施設で作られた食品や雑貨などを販売。

2022年～

すぎのこ農園 2年目

- ・2年目には、24名の区民ボランティアが参加し、多目的農園区画での農作業や団体利用の補助等に取り組んだ。団体農園区画において、新たにシェア区画を設け、団体同士の交流を促進。その数は11団体に増加。
- ・多目的農園区画で栽培する作物は、目的に合わせ品目や品種を変えている。例えば、収穫体験用には、収穫しがいがあり収量が高いもの（ジャガイモの品種キタアカリ等）。一方、施設提供用には、給食の材料として適し、大きさのあるもの（ジャガイモの品種ピルカ等）。
- ・すぎのこマルシェを毎月第2土曜日を基本とし、定期開催。区内の農産物や障害者施設による生産・加工物などの販売を通して、農福連携の取組に対する地域住民の理解と協力を促す。

今後の展望

目指す将来像 ▶

福祉との連携強化を図るとともに都市農業への更なる理解促進を図るなど、都市農地の保全につながる取組を推進していく。

今後の予定や計画 ▶

- ・福祉との連携を一層図るため、障害者の職場実習などの就労支援を強化。
- ・管理棟を活用したマルシェなど障害者団体と連携した事業の拡充。
- ・子ども食堂への食材提供を柔軟に拡充。
- ・食育、食品ロスに関する講座など、区民・地域と連携した事業の拡充。
- ・教育機関との連携を強化
- ・インターネット等での情報発信。



ユニバーサル農園の開設に向けて

～課題と対応策の整理～

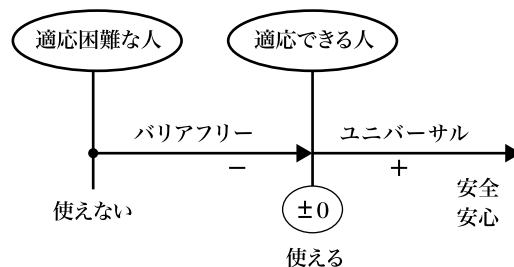
「ユニバーサル農園」とは、誰もが農業体験を通じた農業の持つ多面的な機能を楽しみ、障害者、生活困窮者、ひきこもり、触法者その他の子どもから高齢者までの多世代・多属性の者が交流・参画する農園である。障害者、高齢者、生活困窮者、ひきこもりや触法者等の生きづらさを抱えた者等の多世代・多属性の方々が交流・参加する多様な場を農業を通じて生み出すとともに、様々な社会的な課題の解決にも資することを目的としている。農園への参加を通じて、予防・リハビリ効果、癒しを提供する効果、社会参加を促す効果等が見込まれる。波及的な効果として、農地の維持や保全、新規就農者の増加といった農業振興への期待もある。また、これに関連し、より農業経営的な効用を期待した「ユニバーサル農業」もある。

「ユニバーサル」は、「すべての人の」「普遍的な」と訳され、「ユニバーサル」に類似する代表的な言葉として「バリアフリー」がある。デザイン工学の分野では図1のように概念整理されており、この2つの言葉の特徴を把握することができる。すなわち、「バリアフリー」は、バリアのある状態を発想の出発点とし、「使える(0)」段階までを到達点とするのに対し、「ユニバーサル」は、「使える(社会に関わる)」ことは当然のこととし、「特別な人のための」「特別なやり方」ではなく「すべての人の」「普遍的な」安全、安心、快適を目指している。「排除」ではなく「包摂」が、発想の源となっている注2)。

複数の事例からもわかるとおり、農園での活動には「多様な参加者」の健康で豊かな生活を実現させる効果があり、農園芸活動あるいは農園という環境そのものに「包摂」の要素が含まれる。一方で、営農における農作業事故の発生件数が全産業と比較して高い割合で推移している現状があることから注3)、対応策として、農園参加者の個々の特性を理解すること(人的な配慮)に加え、農場内の整理整頓、資材や農具の管理・点検といった作業環境の整備が重要となる。

GAP(農業生産工程管理)は、適切な農場管理を実現させる有効なツールの一つである。GAPを活用した障害者雇用の優良事例では、安全性を確保した快適な農場空間の整備が、結果として、障害者の業務分担(活躍の場)の拡大へと繋がっている注4)。事業の核を農業に置き、作業に従事する全ての人を対象としたGAPによるルール作りや基準の明確化は、営農における「ユニバーサル」の具現化に繋がる取組として期待される。

さらに、GAPは継続的に実践することに大きな意義があり、同事例では、日々変化する状況に応じて、継続的に取組を更新させている。この点について、「体験農園」である「ユニバーサル農園」においても同様のことが言える。植物を扱う農園の環境、参加者、参加者間の関係性等々は日々変化し、成長の過程が必ずある。そうした変化への理解や、変化に応じた環境整備は、「ユニバーサル農園」の開設に向けた対応策を検討する上で、重要な視点になるのではないだろうか。



バリアフリーとユニバーサル

出典：川内美彦(2001)『ユニバーサル・デザインーバリアフリーへの問いかけー』学芸出版社

注2)「バリアフリー」に関する考え方の整理についてはこの限りではない。

注3)農作業事故に関する実態の詳細は、農作業安全情報センター(農研機構 農業機械研究部門)のホームページ(<https://www.naro.affrc.go.jp/org/brain/ankenweb/index.html>)を参照されたい。

注4)詳細は、中本英里・澤野久美(2020)「「ユニバーサル農業」とJGAP導入が障害者の職域拡大に与える影響」『農業経営研究』58(3):21-26.を参照されたい。

おわりに

～持続可能なユニバーサル農園を目指して～

本書では、ユニバーサル農園の導入を推し進めると、「社会参加を促す効果」、「予防・リハビリの効果」、「癒しを提供する効果」、「学びを促す効果」の4つの効果が生じる、という仮説に基づいて、それぞれの代表的な事例を分析してきた(表)。結果、全ての事例がそれぞれに多面的な機能を有していること、そして、地域全体に様々な波及効果を与えていることが明らかになった。

ユニバーサル農園は、障害者、生活困窮者、ひきこもりや触法者等の生きづらさを抱えた者等、多世代・多属性の者が利用できる体験農園である。こうした多世代・多属性の参加者が、農業体験(市民農園)や多種多様な活動やイベント等を通じて協働や交流を行うことで、農園を媒介としたコミュニティの場として機能し、さらには、生きづらさや働きづらさを感じている人々の社会参画を促進する効果も得られることが分かった。また、特定の作物やハーブ等を栽培することで、利用者に癒しを与えるなど、園芸療法や園芸福祉等の効果がより顕著となる事例も多く見られた。

以上のことから、ユニバーサル農園の導入は、社会にとって大きな意義を持ち、SDGs(持続可能な開発目標)に貢献する可能性があると考えられる。2019年に開催された「ノウフクフォーラム2019」では、農福連携により17のうち10の目標に貢献することが想定されたが、より包括的な対象を支援するユニバーサル農園は、SDGsの達成に向けてもさらなる貢献が期待できる。

しかしながら、従来の農福連携の取組(福祉事業所が農業分野に進出する等)とは異なり、農業生産が主要な目的ではないため、収益性に課題を持つ事例も多く見られ、持続可能性の高い運営方法を模索する必要があるとも感じられた。そのためには、利用者のニーズに応じた農園のスタイル、合理的配慮や快適性の向上等を図り、人々が集まりやすい農園を目指すことが重要である。これにより、公共性を高めることができ、公的な支援の対象になる可能性がある。

具体的には、栽培する作物・使用する道具・休憩所・水場・園路・経営規模・交流イベントなど、コンテンツやインフラとしての様々な配慮や運営要素を検討することが必要であると考えられる。また、基礎自治体や地域の協議会と連携するなど、地域のボランティアや有料会員を募集したりすることで、地域に根差した運営を行うことも重要である。さらには、地域機関のみならず、地域内外の企業参画も重要であると考えられる。

(表) 参考事例の一覧表

組織名	所在地	主な作物	面積(全体)	農園の形態	イベント	主な効果
公益財団法人 喝破道場	香川県高松市	ハーブ、トウガラシ	1ha	合宿形式の自立支援	お花見、BBQ 等	社会参加を促す効果(職業訓練、協同体験の場)
かたひらの畑	福島県郡山市	多品目の野菜	54a	農業体験農園	収穫体験会、加工体験会 等	予防・リハビリの効果(生きがいづくり)
認定NPO法人 UNE	新潟県長岡市	コメ、どぶろく、クロモジ	1.4ha	農業体験農園	農林業体験会、加工体験会 等	
NPO法人 土と風の舎 こそどファーム	埼玉県川越市	多品目の野菜、ハーブ	80a	農業体験農園	旬を食べる会、餅つき大会、クラフト 等	癒しを提供する効果(精神的健康の確保)
とちぎヒーリングファーム	栃木県野木市ほか	多品目の野菜	1.2ha	農業体験農園・市民農園(区画貸)	栽培講習会、さつまいもの収穫体験 等	
NPO法人たかつき デイサービスセンター 晴耕雨読舎	大阪府高槻市	多品目の野菜、花卉、ハーブ	10a	農園の園芸療法的利用	祭、家族見学会、自然体験学校 等	学びを促す効果(農業体験の場)
杉並区農福連携農園 すぎのこ農園	東京都杉並区	多品目の野菜	32a	農業体験農園・市民農園(区画貸)	収穫体験会、マルシェ 等	

協力：千葉大学教授 吉田行郷 農業・食品産業技術総合研究機構 中本英里
企画・編集・制作：(株)マイファーム 農都共生総合研究所

農都共生総合研究所
農福連携ユニバーサル農園研究チーム

川辺 亮
天野 雄一郎
榊原 圭弥
平井 喬

